

# マゴリアムおじさんの 不思議なおもちゃ屋

2007(平成19)年12月5日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★



監督・脚本=ザック・ヘルム/出演=ダスティン・ホフマン/ナタリー・ポートマン/ジェイソン・ベイトマン/ザック・ミルズ(角川映画配給/2007年アメリカ映画/95分)

……テレビゲーム全盛時代の今、何とも楽しいおもちゃ屋が登場したが、さて子供たちの反響は……？ また、創業者の引退と事業承継という難しい論点に対して、ナタリー・ポートマンはいかなる対応を……？ 今ドキ珍しい、単純な夢物語だから、かえって新鮮かもしれないが、大ヒットはちょっとしんどいのでは……？

## あの脚本家が、子供向け作品を初監督

この映画を監督したザック・ヘルムは、『主人公は僕だった』(06年)で小さくひねった脚本を書いた脚本家で、私は「やっぱり若手脚本家は、頭が柔軟……」という小見出しで紹介し、「このように次々と才能ある若手が登場するところが、ハリウッドのすごいところ。この映画は、頭の柔軟な若手脚本家でなければ到底生まれなかったもの」と書いた。また私はそこで、「彼は次に、ダスティン・ホフマンやナタリー・ポートマンが出演する『MAGORIUM'S WONDER EMPORIUM』(07年)で監督デビューを果たしたとのこと」と書いた(『シネマルーム13』415頁参照)。『マゴリアムおじさんの不思議なおもちゃ屋』は、まさにこの英題の映画だ。

しかし、この映画は『主人公は僕だった』とは全く異なる、完全に子供向けの夢いっぱいだが単純な映画。したがって、私のような「ひねたおじさん」にはあまり向かないのは当然で、ファンタジー色豊かな映像が次々と登場してくるのだが、さすがにそれに目を輝かせるというのはムリ……。やはり、この映画のターゲットは親子連れに限定されるのでは……？

## ダスティン・ホフマンはさすがに安定！

あの『卒業』（67年）で彗星のように登場したダスティン・ホフマンも既に70歳。ハリウッドを代表する俳優として彼の身長の高さはかなりマイナスポイントのはずだが、そんなマイナスをものともせず、2度のオスカー受賞と7度のノミネートはすごいもの。

そんなダスティン・ホフマンが、この映画では今年243歳を迎えた「マジカル・ワールド」のオーナー、マゴリアムおじさんの役をいかにも楽しそうに演じている。このマジカル・ワールドの店が開業以来113年間も大盛況を続けているのは、ひとえにマゴリアムおじさんの魔法の力のおかげ。しかし、何ゴトにも永遠とか無限はないもので、彼はいよいよ今引退を決意した様子。すると、マジカル・ワールドの営業はどうするの……？

それについて、マゴリアムおじさんの戦略はバッチリ。つまり、これまで店の支配人として立派にその役を果たしてきた23歳のモリー・マホーニー（ナタリー・ポートマン）に店を譲るといふ戦略だ。しかし、そんなにうまくオーナーの思惑どおり事業承継ができるの……？

## 事業承継の相談はどんな専門家に……？

個人経営の事業をうまく承継していくのは結構難しい作業。資産の評価の問題、税金の処理問題等々、乗り越えなければならない課題がいっぱい。そんな場合に相談する専門家は日本では弁護士か税理士だが、この映画ではなぜか経理士のヘンリー・ウェストン（ジェイソン・ベイトマン）。

経理士は頭が固いと一般的に思われているためか、ヘンリーのキャラ設定はまさにそれ。したがって、マジカル・ワールドがマゴリアムおじさんの魔法の力によって維持できていることを彼が全然理解できないのは仕方なし。すると、その道の専門家である私の目には、そんなヘンリーがマゴリアムおじさんの店の資産評価をどういう根拠でいくらと査定したのか、ということになるのだが、お子様向けのこの映画ではそんな点についての論及がないのは当然。

経理士ヘンリーの役割は、ある時点でモリーの奇跡を目撃することによって、その固い頭を転換していくということだけ……？

## ナタリー・ポートマンの決断は……？

今やハリウッドを代表する若手美人女優に成長したのが、1981年生まれのナタリー・ポートマン。『コールドマウンテン』（03年）（『シネマルーム4』139頁参照）、『クローサー』（04年）（『シネマルーム7』144頁参照）、『Vフォー・ヴェンデッタ』（06年）（『シネマルーム10』110頁参照）で私が絶賛している、私の大好きな演技力抜群、魅力抜群の女優。

そんなナタリー・ポートマン扮するモリーが、この映画ではマゴリアムおじさんからおもちゃ屋の承継を申し渡されたため大混乱。ザック・ヘルム監督が設定したモリーのキャラは、少女の頃天才ピアニストと騒がれ作曲を目指したが、モリーのピアノ協奏曲第1番は全然作曲できず、未だにラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を弾くだけで、自信喪失気味というもの。そんな中、彼女なりのふんぎりをつけ、マゴリアムおじさんの店をやめて作曲の道に専念しようと考えていたところでのマゴリアムおじさんからのそんな申し出だったから、彼女はそれを断固拒否。

しかし、そんな彼女に対しておもちゃたちはどんな反応を……？ また、現実にはマゴリアムおじさんがいなくなってしまう後、モリーはどんな決断を……？ ナタリー・ポートマンの魅力全開！ とまでいかないのが少し残念だが……。

## 子供の方が意外としっかり……？

この映画にはもう1人のキーマン（キーチャイルド……？）がいる。それは、マジカル・ワールドの店のお手伝いをしているエリック・アップルバウム少年（ザック・ミルズ）。彼はこよなくマジカル・ワールドを愛していたが、大人たちが事業承継の問題をうまく処理できないことによって、店が閉鎖されるかもしれないという厳しい現実をつきつけられることに……。

現にマゴリアムおじさんが引退（死亡？）してしまった後、モリーは「私にはとてもオーナーはつとまらない」と宣言して店を出ていき、ヘンリーの資産評価のままに店を売却するという方針を打ち出したから大変。子供の力だけで、モリーの決めたそんな方針を転換させることができるのだろうか……？

## 今ドキの子供たちは……？

この映画のポイントは、何といっても「主人公」となるおもちゃ屋づくりで、プレスシートにはその苦労話がタツプリと盛り込まれている。また、巨大なマジカル・ワールドの店内を走り回るシマウマたちの動物はすべてホンモノとのこと。

今ドキの子供たちがおもちゃにどの程度親しんでいるのかよくわからないし、テレビゲームの方が関心が強いのではという心配もある。そんな中、スクリーン上で展開されるマジカル・ワールドのおもちゃの楽しさを、今ドキの子供たちはどの程度味わうことができるのだろうか……？ この映画の成否がその一点にかかっていること明らかだが、私は少し心配……。

2007(平成19)年12月7日記